

〔研究ノート〕

グラムシ・ヘゲモニー概念の展開と現代世界

松田 博*
小原 耕一**

キーワード：グラムシ，ヘゲモニー，市民社会，障地戦，サバルタン

はじめに

グラムシのヘゲモニー概念は、いわゆる先進国のみならず発展途上国においても政治経済・社会・文化の総体的な民主主義的変革およびその持続的かつ内発的発展にもとづく将来社会形成の展望においても重要な意義をもっている。それは近年ブラジルおよびメキシコで開催されたグラムシ研究国際会議が鮮明に示している。この報告では、近年のグラムシ研究の展開をふまえつつ、その現代的民主主義的変革論における意義を検討したい。グラムシ研究は、その出発点においては、1950年代以降「構造改革論」や「民主主義的接近・移行論」（移行過程・移行形態論）など先進諸国における民主的変革論つまり「先進国革命論」の問題意識が濃厚であった。しかしながら先進資本主義諸国の影響力・支配力の拡大・深化および1989年以降の「現存社会主義国の挫折」のもとで、「資本主義国家・社会」の強靱かつ複合的ヘゲモニー装置・構造の解明に重点が移行していった。つま

り資本主義国家の政治支配ならびに社会的文化的統合のなかに緻密に織りなされるヘゲモニー関係の解明が、前世紀最後の約20年間のグラムシ研究の中心的テーマとなったといっても過言ではない。資本主義体制の強靱なヘゲモニー装置への関心の増大と対抗勢力側の停滞＝カウンター・ヘゲモニー・サイドの苦悩と模索が、この時期のヘゲモニー研究のコントラストを鮮明に示している。したがってこれまでのグラムシ研究の成果を継承しつつ、それを総合的に現代変革論に結晶させていく課題が、学問的営為の次元においても切実に求められていると考える。

グラムシのヘゲモニー概念は、『獄中ノート』におけるグラムシの考察全体を貫く中核概念のひとつとして、一方では、経済決定論、階級還元論的傾向を強く帯びていた機械論的唯物論の思潮、他方では、それに大きな影響を与えた実証主義（「講壇社会主義」など）および反実証主義の思潮（ジョルジュ・ソレル、ベネデット・クロウチェなど）にたいする批判的考察のなから鋭角的かつ多面的に練り上げられていった、ということができる。したがって、グラムシが獄中にあった第一期、第二期、第三期

* 立命館大学名誉教授

** 国際グラムシ学会評議員

(1926-37)のそれぞれにおいて、また、グラムシがとりくむ主要な研究テーマとの関連で、ヘゲモニー概念の多面的な練り上げ、豊富化にかかわる複合的なプロセスを明らかにしておくことが重要である。

『獄中ノート』校訂版の刊行（1975年）以降も、グラムシのヘゲモニー概念は、第二期の「トゥーリ特別ノート」、とくにマキアヴェリ論ノート（ノート13）を中心に議論されることが多かった。このため第三期の「フォルミア特別ノート」におけるグラムシの複眼的な練り上げ作業についての解明は、きわめて不十分であったといわねばならない。校訂版編者のジェルラターナが「編者序文」において第二期の一連のノートを重視し、したがって第三期の諸ノートの意義を相対的に軽視する結果になったことも（サバルタン＝従属的社会集団にかんする重要な諸草稿が含まれる「ノート25（サバルタン論）」が最近まで軽視ないし無視されてきたことが、その顕著な例である）看過できない要因の一つである。しかしながら同時に、「アメリカニズム・フォード主義」型のヘゲモニー論（ノート22）への注目（レギュラシオン理論におけるフォーディズム問題）やサバルタン＝従属的社会集団にとってのヘゲモニー問題（ノート25）への関心（サバルタン・スタディーズ）、S. ホールなどのカルチュラル・スタディーズにおけるコモンセンス、ポピュラーカルチャー、フォークロアとヘゲモニーとの関連性の探求、さらにはサイドの知識人論や「南部問題」論の重視などが、グラムシ研究の潮流においても、ヘゲモニー論の自覚的探求をうながす積極的契機となったことも見逃してはなるまい。これらの問題関心および探究が、全体として、ヘゲモニー論の豊富化のための新たな触媒

となったことはいうまでもない。

1. ヘゲモニー概念の生成

『獄中ノート』執筆以前のグラムシは、主として社会変革における「階級同盟の体系」を創出する労働者階級の政治的指導的力量を形成する課題と関連づけて、ヘゲモニー概念を把握していた。彼は「プロレタリアートは勤労人民の大多数を資本主義とブルジョア国家に反対する行動に決起させる階級同盟の体系の創出に成功するのに応じて、指導的かつ支配的階級に成長し得る」¹⁾として、ヘゲモニーを労働者階級の指導的力量の水準とほぼ等置している。その背景には、1920年代の西欧諸国における変革過程の深刻な挫折と敗北、イタリアにおけるファシズムの権力掌握・ファシズム独裁体制の成立など、グラムシの痛切な体験がある。言い換えれば、この時期のグラムシのヘゲモニー観を要約すれば、レーニン最晩年の西欧変革運動挫折にたいする「自己批判」的見解を基礎に、レーニン没後の「統一戦線」論争を媒介としつつ、イタリアや西欧諸国における変革主体形成に焦点化されたものであったといえる。

ところが、『獄中ノート』においては、この概念は、「第1ノート（Q1）」（1929年2月以降）から大きく変貌をとげ、ヘゲモニー概念の「刷新・拡張」が開始されることになる。その特質の第一点は、逮捕・投獄される以前のいわば政治的戦略概念としてのヘゲモニーから、より一般的な「歴史的的分析概念」としてのヘゲモニー観への「刷新・拡張」である。フランス革命以降のヘゲモニーの歴史的形成過程あるいはリソルジメントにおける国民国家形成とそのヘゲモニー問題の史的分析から、皮相な図式主

義つまり短絡的な経済決定論や階級還元論に陥らない国家・諸政治勢力（政党など）・諸社会集団のダイナミックな関係論的把握つまり「ヘゲモニー関係」およびその歴史的・政治的特質解明への展開である（32年5月2日、タチアナ宛書簡参照）。

そこではヘゲモニーの主要な契機は、「知的・モラル的指導」ないしは広義の「文化・教育的指導」であることが明確化される。「ある社会集団の優位性は二つの形態、つまり『支配』および『知的・モラル的指導』として具現される。支配はある社会集団が敵対集団を武力を用いても『一掃』ないし屈服させようとする形態であり、指導は近親的集団と同盟の集団にたいする形態である。ある社会集団は統治権力を獲得する以前にすでに指導的でありうるし、また指導的であらねばならない（これが権力そのものの獲得にとっての主要条件のひとつである）。権力獲得は、その社会集団が権力を行使する場合、そしてさらにその権力を強力に掌握する場合において、その社会集団は支配的集団となるが、かれらはなお『指導的』でありつづけねばならないのである」²⁾。さらに、グラムシは、指導と同意の契機の重要性・優位性を強調し、次のように指摘している。

「権力に到達する以前においても、ヘゲモニーをめざす活動はありうるし、またなくてはならないということ、さらに有効な指導をおこなうには、権力がもたらす物質的な力のみに依拠してはならないということである」³⁾。レーニン没後のコミンテルン指導部においては「統一戦線」（当時は戦略ではなく防御的かつ戦術次元であったが）をめぐる熾烈な論争が展開され「陣地戦」という用語も多様なニュアンスをもって使用された。グラムシが1929年獄中で

『ノート』執筆を開始したとき、すでにその変革論は鮮明な輪郭を形成しつつあった。それは「ロシア革命」の経験や当時の「正典」レーニンの『国家と革命』の理論を相対化し、また西欧諸国における「機動戦」型変革運動の攻勢から「自己防御」をはかり、その運動を「挫折」せしめた資本主義国家・社会のヘゲモニー構造の分析をふまえた変革論の新たな探求に他ならなかった。これまでのコミンテルン史研究が明らかにしているように、その「世界政党」としての理論装置は資本主義の直線的危機激化論つまり「全般的危機論」を情勢認識の基礎とする「機動戦」型変革論（「国家権力の直接的・暴力的奪取」）の傾向をレーニン没後ますます濃厚にしていた。この時期グラムシの変革構想は「先進国革命の困難性」の強調から「機動戦型変革論（ロシア革命をモデルとする）」の西欧諸国におけるたんなる「困難性」の次元に回収されない、その「不可能性」かつ「有害性・誤謬性」（変革主体の客観的・主体的条件認識における）という新たな次元へと展開しつつあったのである。したがってグラムシの変革論をこれまでのように「先進国革命の困難性」という次元のみで評価することはできない。まさに「国家権力の直線的・無媒介的奪取＝獲得」という蜂起主義的な機動戦型変革論の西欧諸国における不可能性・有害性・誤謬性という新たな認識の深度に到達したからこそ、彼のヘゲモニー論を構成する国家論、市民社会論、陣地戦論等々の重要な概念群が飛躍的に豊富化されていくのである。つまり「ロシア革命」とはまったく質的に異なる変革論の探求が『ノート』において展開されていくのである。その意味で『ノート』以前と以降を、社会変革論という分水嶺を設定すれば、その間には深い質的差異があるこ

とを強調しておきたい。コミンテルン「綱領」やその基本路線が「資本主義の全般的危機激化論」、機動戦型「プロレタリア革命論」や「社会ファシズム論」、「中間勢力主要打撃論（統一戦線論の実質的否定・排除）」「過渡期政府全面否定論＝プロレタリア権力直行論」（「不純要素排除」論）へと混迷の度合いを深めていくこの時期、グラムシは各種の「検閲」を考慮した間接的表現ながら、コミンテルンに対する政治的不同意・批判にとどまらず、その哲学を含む理論的・思想的な批判へと、その探求を深化させていくのである。グラムシの獄中における「知の陣地戦」とは、以上のような文脈で位置づけられる必要がある。「静止画像」的で「単性生殖」的な、硬直したグラムシ理解では、獄中での「知の陣地戦」におけるグラムシの理論的思想的営為の苛烈さも、またそこで練成された創造的な理論的到達点もリアルかつ正確に理解するのは不可能である。グラムシの理論的思想的探究を、逮捕以前の時期と獄中での探求を直結させたり、レーニン理論と（とくに国家論など）無媒介的に連結させたり、コミンテルンの理論的枠組みのなかにグラムシを押し込めたりなど、短絡的で「静止画像」的なグラムシ像が「再生産」されている。それだけに『獄中ノート』各草稿の綿密な分析・検討にもとづく（というのは前述の短絡的「見解」は、ほとんどそのような学問的検討を怠り、いわば我田引水的に都合のよい個所だけを「引用」しているのだが）ヘゲモニー概念の生成・発展過程を明らかにする課題は、今後も研究の主要な課題の一環でありつづけるといえよう。

2. ヘゲモニー概念の刷新

グラムシによるヘゲモニー論の刷新は、マルクス『経済学批判序言』（以下『序言』と略す）のグラムシ的解釈と深く関連している（グラムシが『獄中ノート』で再三言及・引用する『序言』については巻末の注記を参照されたい）。というのは、ある社会構成体（＝グラムシの用語では「歴史的ブロック」）から新たな社会構成体への移行は、「強力」にもとづく強制的断絶と飛躍による電撃的過程ではなく、継承と質的再編、つまり「陣地戦」的過程を特徴とする持続的な社会変革の過程に他ならないからである。この過程はまた、市民社会による政治社会（国家）の持続的再吸収過程およびソチエタ・レゴラータ（*Società regolata* 自己規律的社会、グラムシは自己統治社会と等置している）の形成にいたる「数世紀にわたる」長期的過程つまり「根本的矛盾によって引き裂かれた社会」の克服・止揚という人類史的過程である。

グラムシが「市民社会の諸民間組織」つまりアソシエーション（結社）を重視するのは、それがたんに国家に対するカウンター・ヘゲモニーの“陣地”としてだけでなく、この「政治社会（国家）の市民社会への再吸収」および「ソチエタ・レゴラータ」の形成、つまり自己統治社会の核として位置づけているからである。

青年期のグラムシは、将来社会を「最小限の強制と最大限の自由」にもとづく社会と述べたが、獄中におけるヘゲモニー概念の練り上げは、マルクスの『序言』を大きく発展させ、「政治社会（国家）の市民社会への再吸収」および「ソチエタ・レゴラータ」という新たな理論的地平を切り開いたといえる。いわゆる機械的

唯物論が、「国家の死滅」や「無階級社会」というユートピア的観念を脱却できず、マルクスの独創的着想を理論的に発展させることに失敗してきたが、グラムシはすでに1930年代初期にマルクス思想を独自に読み替え発展させて、社会構成体の移行とヘゲモニーとの関係において、独創的な地点に到達していたといえるだろう。つまり「構造と上部構造との必然的相互関係」（作用・反作用の機械的關係ではない）としての歴史的ブロック＝社会構成体の内在的移行の論理は、機動戦型＝国家権力の「奪取」による「旧国家・社会」の破碎・断絶、新権力による「新国家・社会」の強力による「建設」という「神話」に根本的に対決する論理に他ならない。

また、このような理論的文脈にもとづけば、現代市民社会における諸運動、つまり労働運動、協同組合運動等の社会運動、NPO、NGO、NSM（New Social Movement）などのアソシエーション、さらに自治体（local government）、多様な分野の市民運動、国政・地方でのレフェレンダム（国民投票・住民投票）なども、国家に対するカウンター・ヘゲモニーのみならず、自己統治能力の育成という社会的文化的ヘゲモニー能力の形成が不可避かつ必然的課題となる。

その意味で、グラムシのヘゲモニー概念は、すぐれて自己言及的概念である。とりわけ市民社会において発生し、政治社会の構成要素となったアソシエーションたる近代政党が政治社会・市民社会の両次元における有機的ヘゲモニー装置としての機能を果たすためには、他のアソシエーションにもまして、すぐれてヘゲモニーの自己言及的契機に自覚的な組織であることが求められている。

1989年の東欧社会主義諸国の崩壊や1991年の

ソ連の解体、ソ連共産党の消滅は、グラムシの思想とは逆に、「最小限の自由，最大限の強制」にもとづく体制が、ヘゲモニーの自己言及的契機を欠落させ、「市民社会と人間性を抑圧する政治社会」に他ならなかったことを露呈したのである。多大な犠牲を歴史の代償として支払った「旧社会主義国家の挫折と解体」から汲み取るべき歴史の教訓は重くかつ大きい。われわれはそれを「他山の石」として、現代の変革論の深化に生かす態度が必要であろう。現代の資本主義的社会構成体の内部で生成し発酵し将来社会に継承されるべき可能性を含有する諸契機を自覚的に発展させること、つまり当面の社会変革の契機のみならず、将来の「自己統治社会」における自己統治能力に継承されていくその萌芽の諸契機との統一的・総合的接合こそ現代の「陣地戦」の忘れてはならない要点といえよう。つまり現代の陣地戦とは、支配的ヘゲモニーにたいする批判的・抵抗的側面と自らの自律的な自己統治能力（＝知的モラル的改革）の形成という建設的・創造的側面（それは前述の持続的な「再吸収過程」の必然的な系であるが）の統一に他ならない。グラムシはヘゲモニー論と関連付けた「陣地戦」における「批判と建設（ないし創造）」の両契機の統一の重要性について政治論のみならず社会・文化論においてもたびたび強調している。その要点は「建設・創造なきヘゲモニー闘争」はありえない、ということであり、変革主体にとっては批判的能力のみならず建設的・創造的能力の形成・成熟が常に問われるということである。

3. 「永続革命論」批判

グラムシによるヘゲモニー概念の「刷新・拡

張」の第二点は、いわゆる「経済主義（経済決定論）」批判およびそれと密接に関連する「永続革命論」批判の文脈で遂行される。前者は「構造と上部構造とのあいだの必然的で不可欠な関連性」⁴⁾の総体的認識つまり社会構成体の複合的把握を欠き、資本主義的危機の直線的深化論（いわゆる「全般的危機論」）や単純かつ粗雑な自動崩壊論、破局論などの非科学的前提となっていた。

この誤った命題は、政治過程の複合的ダイナミズムを把握し得ず、かつ「上部構造」とくにイデオロギーと政治の能動的役割を減価、矮小化させ、さらに「強制の鎧を着けたヘゲモニー」たる「国家」固有の意義を看過させるものである。それはまた、グラムシが「経済主義」の弊害として鋭く批判しているように、マルクスの思想に内在していた理論的契機（イデオロギーの実在性とその能動的意義など）を欠落させることによって知的・文化的影響力の「大部分を喪失」⁵⁾するという結果を招き「その教義本来の威信を低めるような作用を及ぼした」⁶⁾のである。

したがって「歴史理論の領域のみならず、とくに政治の理論と実践においても経済主義と闘わねばならない」⁷⁾のであり、それは「ヘゲモニー概念の発展」によってのみ達成されるものであった。その意味で経済決定論批判の系としての「ヘゲモニー概念の刷新・拡張」は「国家概念の刷新・拡張」へと内在的に連動する内実を有しているのである。

さらに付言しておきたいのは、「経済主義」を理論的基礎とする「永続革命論」批判もまた、グラムシ的ヘゲモニー概念の刷新・拡張にとって不可避的テーマであった、ということである。「(永続革命の) 定式は、大規模な大衆政

党と経済的労働組合がいまだ存在せず、社会がまだ多くの面において、いわば流動状態にあった歴史的時期に固有のものである」⁸⁾。つまり、農村部の後進性、若干の主要都市（パリのような）への政治的機能の独占的集中、国家機構の相対的未発達と「市民社会」の国家からの広範な自立性、軍隊組織の特殊性、国際的経済関係・世界市場と国民経済との乖離等が「永続革命論」の社会的・歴史的基盤であったが、1870年以降これらの要素は全面的に変化し「国家の国内的、国際的な有機的關係はさらに複雑かつ重要となり『永続革命』という1848年の定式は、政治科学における『市民社会のヘゲモニー』によって超克され発展させられた」⁹⁾。つまり、「近代民主主義の堅固な構造は、国家組織としても、市民生活における諸組織の総体としても、政治のアルテ（術）にとつての陣地戦における『塹壕』と恒常的前線拠点となっている」¹⁰⁾。ここにおいて「陣地戦」概念は、退却や後退にかかわる防御的な戦術的概念（クラウゼヴィッツ『戦争論』参照、1920年代におけるコミンテルンの主要傾向であった）から近代国民国家の「民主的」ヘゲモニー装置の体系およびそれにたいするヘゲモニー闘争の「アルテ（術）」という能動的・建設的な戦略的概念に深化している。その意味で陣地戦論は、ヘゲモニー論の有機的な一環として練り上げられたのである（グラムシが批判した「永続革命論」は、前述の直線的「権力奪取」＝機動戦型の変革論であり、民主主義的変革の継続的深化としての、つまり陣地戦型の「永続革命」は否定していないことを付言しておきたい）。

4. 国家概念の刷新

グラムシは国家概念に関して次のように指摘している。「国家の一般概念のなかには、市民社会の概念に属する諸要素が含まれていることが見過ごされてはならないからである（国家＝政治社会＋市民社会，すなわち強制的の鎧を着けたヘゲモニーという意味で）」¹¹⁾。彼は『獄中書簡』においても国家を強制的支配装置に還元する見解への根本的批判（スターリンのみならずレーニン『国家と革命』を念頭においていることは明白である）を明記している（31年9月7日，タチアーナ宛）。

この草稿においてグラムシは、二重の意味で「国家概念の刷新・拡張」を図っている。その第一は、前述したヘゲモニー概念の刷新・拡張と連動しつつ、国家を強制的支配機構に還元せず、官僚的・強制的機構に支えられた支配的社会集団の政治的かつ知的・道徳的指導の複合的総体として把握することで、政治社会（狭義の国家）＝強制（強力）的支配と服従，市民社会（広義の国家）＝指導と同意（説得）の両契機を動的に把握することを可能にした。このことは、「国家とは指導階級がそれによって自己の支配を正当化し維持するのみならず、被統治者から能動的同意を獲得することを可能とする実践的および理論的活動の総体」¹²⁾ との記述に端的に示されている。

第二には、以上のような「国家概念の刷新・拡張」は「政治社会の市民社会への再吸収」を理論的に可能にする。つまり「国家の死滅」論を超えて「国家＝強制的の要素は，ソチエタ・レゴラータ＝自己規律的社会（あるいは倫理的國家ないし市民社会）の要素が顕著になっていく

につれて，ますます衰退していく」¹³⁾ という国家観を導きだす。この点は，マルクスの知的独創性の復権の企図のみならず——自己規律的社会の形成すなわち政治社会の市民社会への「再吸収」の後にはじめてマルクスの世界観は「止揚」されるであろうと彼は記している¹⁴⁾ ——自由主義的国家観およびファシズムの全体主義的国家観を批判しつつ同時にコミンテルン系国家論の限界性の内在的超克を企図していたグラムシにとって，不可欠な理論的視点であった。つまり「再吸収」問題と「自己規律的社会・自己統治社会」形成との理論的総合こそ，グラムシが『獄中ノート』において到達した「国家概念の刷新・拡張」の新たな地平であった。それゆえ「国家＝政治社会＋市民社会」という定式は，「国家が漸進的に消滅し，かつ自己規律的社会のなかに溶解していくという傾向をもつものとみなす理論にとって，根本的な点である」¹⁵⁾ と強調したのである。従来のグラムシ研究が彼の国家論の意義に言及しつつも，前述の独創的意義を評価しえなかったのは，『獄中ノート』旧版の重大な欠陥のみならず，戦後においてもレーニン『国家と革命』の「正典」としての影響力の大きさを示すものであったといえよう。

獄中におけるグラムシの探求は，ヘゲモニー観の刷新・拡張と連動しつつ国家観の深い刷新・拡張（国家＝政治社会＋市民社会）に至り，またそれは「国家死滅論」を転換した「政治社会の市民社会への再吸収」さらには「ソチエタ・レゴラータ＝自己規律的社会」「自己統治社会」の理論的展望にまで到達した。このような探求の背後に，マルクスの『序言』のグラムシ的解釈と練り上げ，とりわけ社会構成本＝歴史のブロックの内在的移行とヘゲモニー概念

の刷新が密接に関連しているのは明白であろう。このような刷新は、アメリカニズムなどの検討をへて、「サバルタン集団とヘゲモニー」という根本的なテーマへと発展していくのであり、したがってグラムシのヘゲモニー論の発展・深化を探究するには第二期の「トゥーリ特別ノート」だけでは不十分であり、第三期の「フォルミア特別ノート」をも視野にいれなければきわめて不十分なものになるであろう。ヘゲモニー論においても「静止画像」的なダイナミズムを欠く見解が少なくないが、第二期・第三期の「ノート」を総合的に把握することが今後の重要課題であることを強調しておきたい。

5. サバルタン＝従属的社会集団論の展開

すでに言及したごとく、「市民社会」概念もまた前述の点と内在的に連動しつつ「拡張」される。教会、学校、組合等々のアソシエーションが配置される場としての「市民社会」は、支配と従属、指導と同意をめぐる複合的ヘゲモニー関係の場、ヘゲモニー闘争の場であるとともに、政治社会の「再吸収」の諸力形成の場、将来の「自己規律的社会」「官僚統治にたいする自己統治」「経済的平等を基礎とする政治的平等」の諸契機の発芽の場でもある。

「このような市民社会においては、諸個人の自己統治は政治社会と対立することなく、むしろ政治社会の正常な継続と有機的な完成」¹⁶⁾が課題となるのである。すなわち、ヘゲモニー観、国家観の刷新は同時に市民社会観の重大な刷新でもあった。

以上の諸点はまた、多大の犠牲をともなった西欧諸国の変革過程の挫折・敗北の客観的・主体的要因の痛切な考察からも導きだされた。

「東方は国家がすべてであり、市民社会は原初的でゼラチン状態であった。西方では国家と市民社会とのあいだに適正な関係が存在し、国家が動揺すればすぐさま市民社会の堅固な構造がたちあらわれた。国家はただ前線塹壕にすぎず、その背後には一連の強固な要塞と砲台が存在した」¹⁷⁾。

したがって国家をたんなる強制的支配の機構として一面的に単純化して把握するのではなく、国家ヘゲモニー装置（議会をはじめとする三権分立制や公教育制度など）および「市民社会の諸要素によって体现される塹壕や要塞」つまり「市民社会のヘゲモニー装置」（教会、学校、組合、アソシエーション、マス・メディア、政党、企業など）を分節＝接合しうる「国家概念の刷新・拡張」へと、上述の「ヘゲモニー概念の刷新・拡張」は内在的に連動し、さらにこの「国家概念の刷新・拡張」を媒介としつつヘゲモニー・ヘゲモニー装置論がさらに豊富化されていくのである（知識人論、政党論、マス・メディア論、民衆文化・コモンセンス論など）。

したがって、グラムシのヘゲモニー論の『獄中ノート』における「刷新・拡張」の過程は、政治的な次元から市民社会的かつ文化的次元へと深化・発展し、——多様なテーマの分節と接合を重層的に反復しつつ——それによって政治的ヘゲモニー論もさらに豊富化（とくにヘゲモニーの自己言及的・自己刷新的特質や弁証法的ヘゲモニー観の復権など）され、同概念の「広がり」と深まり」が明確になっていく過程と要約することができる。

とくに「フォルミア特別ノート」シリーズにおいて、グラムシのヘゲモニー観は、アメリカニズム、ジャーナリズム、フォークロアなどの諸テーマにおいて新たな発展を示す。本稿では

「サバルタン・ノート」（ノート25）におけるサバルタン集団とヘゲモニー論との関連について、やや立ち入って検討することにしたい。

グラムシ研究者によるサバルタン研究への積極的応答は、1997年のIGS（国際グラムシ学会）ナポリ会議におけるジョーゼフ・ブッティジジの報告「グラムシのサバルタン・カテゴリーをめぐる」であった。この報告は、サバルタン研究の発展とグラムシ研究における「サバルタン・ノート」研究との乖離、つまり後者の遅滞を、グラムシ研究者に鮮明に印象づける画期的な機会となったといっていよいだろう。グラムシ研究の歴史において「サバルタン・ノート」（Q25）は長期にわたって「周辺化」されてきたのである。そして、ブッティジジ研究をふまえて、近年この問題をさらに展開させようとする問題意識を鮮明にしたのが、マークス・グリーン（Rethinking Marxism, 2003）である。この論文でグリーンは、グラムシのサバルタン概念が、他の重要なキー概念と内在的に関連していることを強調して、「サバルタン性のグラムシの定義や理解は、多くの点で、彼のヘゲモニー概念や国家・市民社会概念と直接関連をもって」と指摘している。

グラムシにおいてサバルタン集団が、既存のヘゲモニー関係を超克・変革し自律的・自立的な自らのヘゲモニー関係をいかに形成しうるか？この問題領域においては、サバルタンと知識人との有機的関係の創出（サバルタンの「コンセンサス」から「良識」形成へ、など）、市民社会とサバルタンとの相互関係、政治社会におけるサバルタン、国民国家形成におけるサバルタン問題、「実践の哲学」とサバルタンなどの諸論題が不可避的課題となるが、グラムシが

「トゥーリ特別ノート」以降に取り組んだ多様な論題はまさにこれらの課題の探求に他ならなかった。したがって、「サバルタン・ノート」解説のためには、ヘゲモニー、国家、市民社会等のキー概念との関連性を明らかにすることが不可欠である。

グリーンは、グラムシの中心的研究テーマのひとつであった「歴史記述の方法と方法論」におけるサバルタン問題は「Q1プラン（「第1ノート」冒頭に記された研究プラン）において自覚的であり、それはサバルタンの歴史的研究の「方法的基準」を述べた「Q3 § 90（A 草稿）」において明確となる、と述べているが、基本的に賛同しうる見解である。しかしグラムシの探求は、そこで停止するのではなく、さらなる展開を見る。すなわち、「サバルタン・ノート」（Q25）における「方法的基準」にかんするC草稿に結実していくのである。

すでに指摘したように、グラムシ研究におけるサバルタンおよびそれに関連する諸テーマの研究の立ち遅れは深刻である。たとえば「市民社会とサバルタン」というテーマについていえば、グラムシにおいてはサバルタン論を組み込まない市民社会論はありえず、市民社会論との「有機的關係」を欠落させたサバルタン論もありえない。この市民社会論との「有機的關係」については、さきにあげた論文でブッティジジも一定の解明をおこなっているが、サバルタンと市民社会の二つのテーマを統一的に論じる視点はこれまでのサバルタン研究においても、残念ながら全体としては希薄であったといわざるをえない。両概念を分断してではなく統一的に検討することによって、それぞれの概念のさらなる豊富化、深化が可能となるということを今後の課題の一環として強調しておきたい。

グリーンは、論文の最終章で、「サバルタン解放の変革思想」について論じている。サバルタン論とグラムシ的ヘゲモニー論をふまえた変革論の解明は、グラムシ研究および現代の変革論——とりわけソ連型社会主義モデルの劇的崩壊後の歴史的条件をふまえた——を変革思想の豊富化という方向で発展させる可能性を内包している。グリーンがこの問題に読者の注意を喚起した点は注目に値する。グリーンは「グラムシのサバルタン概念は新しい闘争の土俵を作り出すだけでなく、日常生活の経済、歴史、文化およびイデオロギーのルーツの総合的な分析にもとづく、そうした闘争を定式化するための方法的基準をも作り出すものである」と述べている。しかし、獄中期のグラムシにあって「マキャヴェリ・ノート」（ノート13）を中心として探求される「政治の科学」すなわち変革論の理論的意義についてはグリーン論文において言及されていない。サバルタン解放の課題と変革理論との結合はグラムシ研究において新しい展望を開拓しうる課題といえよう。それはまた「トゥーリ特別ノート」と「フォルミア特別ノート」との総体的検討の意義を鮮明に示す可能性を秘めた課題でもある。

サバルタンの自立性・自律性の発展の水準、段階は「政治社会（国家）の市民社会への再吸収」、「ソチエタ・レゴラータ（自己規律的・自己統治的社会）の形成」という重要な論点と深く関連しているが、グリーン論文ではこの問題への言及も欠落している。この問題の解明は、ロシア革命以降の変革理論・実践の発展にとってきわめて否定的な役割を果たしたスターリニズムおよびコミンテルン教義にたいするグラムシの根本的な理論的批判を解明することとも深く関連しているだけに、グリーンのみならずグ

ラムシ研究における今後の重要な論点となると考える。

現代において国家論レベルの政治変革論——それはしばしば一国革命論に過度に収斂されるが——だけでは「実践の哲学」のスケールに相応しい変革論にはなりえない。社会構成体＝歴史のプロック論という深度における社会的・文化的変革論の探究および両者の弁証法的総合が求められる所以である。この主題にかんするグラムシの直接的間接的な探求は、まさに多様な論点を接合する「総合の闘い」に他ならない。グラムシのコミンテルン型変革論にたいする政治的批判のみならず理論的批判の深まりは、多様な論点で展開されるが、通底しているのは国家論レベルにおける政治的変革論と社会構成体＝歴史のプロック論レベルにおける社会的文化的変革論との機械的・決定論的分断にたいする痛烈な根本的批判である。

おわりに

グラムシにおけるヘゲモニー論を中核とする「実践の哲学」とは「自己統治のアルテ」を修得しようとするサバルタン＝従属的社会集団の「自己表現」に他ならない¹⁸⁾。したがって歴史的にも政治的にも「抑圧」ないし「従属的」地位に周辺化されたサバルタン集団の視点からヘゲモニー論を再構成することも今後の課題であることを強調しておきたい。それゆえ「サバルタン・ノート」の内容は、グラムシのヘゲモニー観の練り上げと到達点を把握するうえで有意義であるだけでなく、同時に現代のサバルタン研究に理論的基礎を据えるうえでも重要である。現実の歴史形成過程からも排除され、「書かれた歴史＝歴史像の形成」からも抹殺ないし

周辺化され、現実社会においても周辺の地位に抑圧され続けてきたサバルタン＝従属的社会集団、かれらは「市民社会」の「記録」からも「記憶」からも抹消されるか、ないしは僅かな「痕跡」しか残していない。それゆえヘゲモニー論とサバルタン論との総合という課題は、グラムシ研究のさらなる発展のためにも、21世紀のグローバルな規模における多様なサバルタン集団がその従属性を克服し、自立的集団としてそのヘゲモニー能力を練り上げ、発展させるための「希望の言説」創造の壮大な「知の陣地戦」に他ならない。

注記

グラムシはカール・マルクス『経済学批判序言』を二度翻訳している。最初は1923年のモスクワ滞在中、レーニンの論文「カール・マルクス」で引用されている『序文』をロシア語から翻訳したもの（「マルクスとその学説」と題して『オルディネ・ヌオーヴォ』に発表）、二度目は獄中でのマルクスのドイツ語原典からのものである。最初の翻訳でグラムシはレーニン論文で省略された『序言』のなかの二つの文章を自分のイタリア語への翻訳でも省略したが、獄中での二度目の翻訳ではまえの翻訳で省略した『序言』の文章を復活させた。とくに獄中のグラムシはこの二つの文章をいろいろな角度から独創的に解釈、分析し、その社会変革論、歴史的ブロック論のダイナミックな構築にとってのきわめて重要な命題として発展させている。以下は、レーニンが省略し、グラムシが復活させたマルクス『序言』のくだりである。

「一つの社会構成（体）は、それが生産諸力にとって十分の余地をもち、この生産諸力がすべて発展しきるまでは、けっして没落するものではなく、新しい、さらに高度の生産諸関係は、その物質的存在条件が古い社会自体の体内で孵化されてしまうまでは、けっして古いものにとって代わることはない。それだから、人間はつねに、自分が解決しうる課題だけを自分に提起する。なぜならば、もっと詳しく考察

してみると、課題そのものは、その解決の物質的諸条件がすでに存在しているか、またはすくなくとも生まれつつある場合にだけ発生することが、つねにみられるであろうからだ」（邦訳マルクス・エンゲルス全集）。

注

- 1) Alcuni temi della quistione meridionale. CPC. pp137-160
- 2) Quaderni del carcere. Istituto Gramsci. Einaudi. 1975（以下 QC と略）。QC19・24C, pp2010-2011（ノート番号の次は草稿番号および校訂版ページをしめす。以下同様）
- 3) ibid. p2011
- 4) Q10・41. XII, p1321
- 5) Q13・18. p1589
- 6) ibid. p1595
- 7) ibid. p1695
- 8) Q13・7. p1566
- 9) ibid. p1566
- 10) ibid. p1567
- 11) Q6・88 p1567
- 12) Q15・10. p1765
- 13) Q6・88 p764
- 14) Q7・33 p882
- 15) Q6・88 p764
- 16) Q8・130 p1020
- 17) Q7・16 p866
- 18) Q10 II・41 p1320

追記

本稿は2005年2月14-15日、オーストラリアのウオロンコン大学大学院で開催されたグラムシ研究国際ワークショップに提出した共同報告を基礎に現代変革論の視点から加筆をしたものである。英語圏の研究は『獄中ノート』校訂版の翻訳がまだ第二巻までしか進んでおらず、その点で報告でも指摘した第二期の「トゥーリ特別ノート」と第三期の「フォルミア特別ノート」とを統一的にとらえる視点が十分とはいえない。しかし近年インドなどの「サバルタン・スタディーズ」グループの問題提起によって、グラムシ研究およびサバルタン研究双方が接近し相互刺

激を与えているのは積極的意義をもつものと評価したい。本稿は両分野の研究が交流することによって、新たな発展の契機となることを強調しているが、グラムシ研究においても「サバルタン・ノート」等の研究は相対的に不十分な分野であり今後の重点的課題の一環として重視したい。サバルタン研究などの動向については松田の「研究ノート」（『立命館産業社会論集』39巻1，2，3号所収），『季報・唯物論研究』第90号（2004年11月）における小原，松田の各論文を参照されたい。なお同上のワークショップ英

文報告集は，Routledge 社から刊行予定である。文末ながら同大学院のスタッフの皆さんとくに原田容子さんに感謝したい。

〔訂正〕

松田「マルクス国家論の『再審』に関する覚書」（本誌第41巻1号）「萱野は触れていないが」（p.221）を「萱野は，マルクスとの関係については触れていないが²」に訂正します。